

今川了俊の紀行文『道ゆきぶり』にみる鯨島

——瀬戸内海におけるクジラの回遊——

村上晴澄

I. はじめに

『道ゆきぶり』は、室町幕府將軍の今川了俊^{いまがわりようしゅん}が九州へ向かった際、京都から赤間関までの陸路の行程や風景、和歌などを記した紀行文である。このような紀行文は、平安時代中期の『土佐日記』に始まり、東海道を通過して鎌倉と京都を行き来した旅人が増加した鎌倉時代以降に数多く執筆されるようになった¹⁾。紀行文は、文学作品として位置づけられることが多い²⁾。一方で、その内容は旅人自らが記した旅の日記ということができる。鎌倉時代の東海道の紀行文である『春のみやまち』に基づき、その行程や風景を分析した研究では、当時の地形や河川流路と行程の関連性、干潟の潮位に基づく通行時刻の分析など、具体的な旅の様子が明らかにされた³⁾。瀬戸内海についての紀行文は、平安時代末期の『高倉院 巖島御幸記』^{こうくらいんいつくしまごこうき}や室町時代前期の『鹿苑院殿巖島詣記』^{ろくおんいんどのいつくしまもうでのき}のように、巖島詣の船旅を取り上げていることが多い。中でも今川了俊による『鹿苑院殿巖島詣記』は、室町幕府將軍足利義満の巖島詣における行程や道中の風景に関する内容が豊富である⁴⁾。筆者は、この紀行文に基づき、歴史地理学の立場から干潟における乗船・下船と潮位との関連や船旅の風景を詳細に分析した⁵⁾。

そこで、『道ゆきぶり』の行程や風景を分析すると、地名から行程を明らかにできる⁶⁾だけでなく、瀬戸内海沿岸で見た潮干の風景を潮汐データで裏付けることも可能である。文学研究の立場からも、『道ゆきぶり』には、地名や風景、名所・旧跡に因んだ和歌が多く記され、九州平定という戦のための旅であることをあまり感じさせない紀行文であると指摘されている⁷⁾。この紀行文は、執筆された当時から広く読まれ、了俊自ら多数の写本を作成したとされる。当代一流の歌人・教養人としても名高い了俊は、九州へも様々な歌論書などの資料を持参し、研究・創作活動を行ったほどであった。晩年の了俊は、九州探題を解任されるなど不遇であった一方で、歌論書の『言塵集』^{ごんじんしゅう}や『了俊日記』、歴史書の『難太平記』を執筆するなど精力的に活動した⁸⁾。そして、『道ゆきぶり』は、『鹿苑院殿巖島詣記』とともに名所図会などに引用されており、江戸時代以降も広く読み継がれていたことが分かる⁹⁾。

『道ゆきぶり』の中には、広島県三原市沖の「鯨島」に関する興味深い記述がある。それは、「毎年12月に鯨島へクジラがたくさんやって来て、翌年1月に帰って行く」という内容である。これとよく似た内容は、Ⅲ章で取り上げる江戸時代中期の旅行便覧である『備後国三原廻』^{びんごのくにみはらめぐり}にも記されている。現在、瀬戸内海にクジラが定期的に姿を現わすことはなく、江戸時代から現代までの捕鯨も、その多くが太平洋などの外洋で行われていた。そのため、現代の日本人にとって、クジラは瀬戸内海のような内海ではなく、外洋の生物という印象が強いといえよう。しかし、後のⅣ・Ⅴ章で述べる通り、かつては瀬戸内海にもクジラが姿を現していたと考えた進藤直作ならびに大村秀雄の研究が存在する。

そこで、本研究では、従来のクジラ研究では取り上げられていなかった『道ゆきぶり』や『備後国三原廻』における、鯨島とクジラに関する記述を中心に分析する。さらに、これらの資料の記述と、進藤や大村が考えた瀬戸内海におけるクジラの回遊経路や時期との関連性を考察する。なお、本稿では特記しない限り、西暦はグレゴリオ暦を用い算用数字で、和暦は漢数字で示してある。

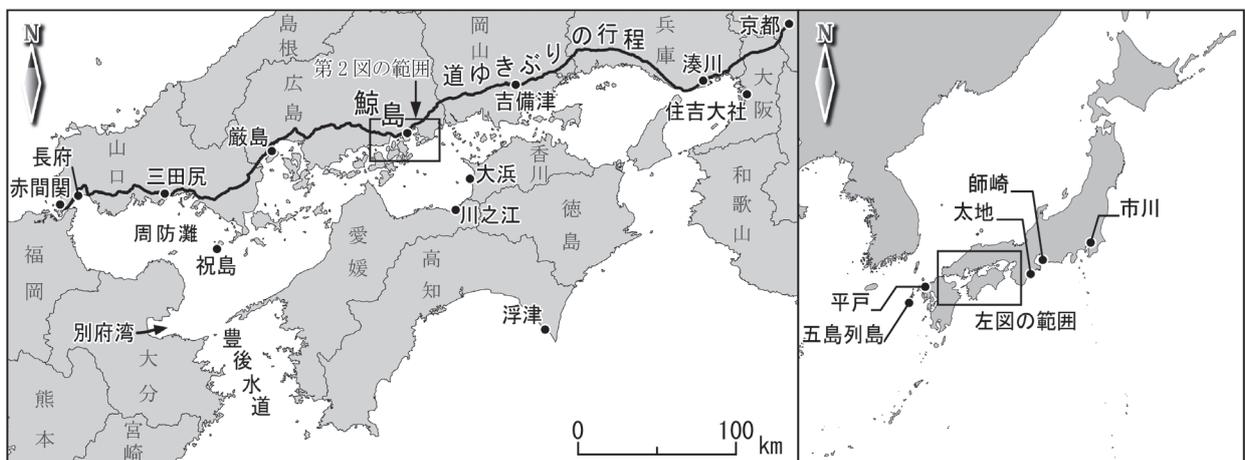
II. 『道ゆきぶり』にみる鯨島とクジラ

室町幕府の九州探題に任命された了俊は、応安四年二月二十日（1371年3月7日）未明に京都を出発して、山陽道と考えられる陸路を西へと向かった（第1図）。神戸市西部に位置する湊川では、京都から見送りに来た友人が1人、2人と別れて行った時のことを「行き憂し」、つまりこの先へ行くのは辛いと記しており、了俊の紀行文では珍しく心情を述べた場面も垣間見られる。その後も『源氏物語』の「須磨」や「明石」の段で知られる明石海峡周辺をはじめ、山陽道沿いの地名や風景の記述が続いているが、日時についてはほとんど記されていない。岡山県西部の吉備津神社では上矢を奉納したことを記すなど、戦に向かうことを伺わせる場面が登場する。そして、備後国（広島県東部）の尾道に到着し、ここにしばらくの間滞在した。それは備後国の国人領主たちの協力を得るためであり、順調に協力を得られず、長期間滞在することになった可能性がある。『道ゆきぶり』は、特に尾道以西の道中における地名や名所・旧跡の記述が詳しいことが指摘されている¹⁰⁾。地名や日時、風景の記述が詳しく、歴史地理学の立場から、行程の詳細な復原や潮汐データを用いた分析ができる区間は尾道以西であり、これは尾道や沼田、三田尻などで長期滞在を余儀なくされた際に、道中の風景を詳しく書き記した可能性も考えられる。

応安四年五月十九日（1371年7月10日）、了俊はついに尾道を発ち、沼田へと向かった道中で、鯨島とクジラに関する話を聞いている。ここからは、『道ゆきぶり』¹¹⁾の記述に基づいて、それらを具体的に明らかにしていく。

『道ゆきぶり』：

①備後の尾道より、安芸国沼田といふ所に移り侍り。道は南東に出でたる山あり。干潟を隔て



第1図 『道ゆきぶり』の行程および本研究で取り上げる地名

たり。戊亥に沿ひて磯路遙かに行くに、吉和といふ所あり。ほどなく夕になりぬ。

②日も暮れぬ 夕潮遠く流れ葦の 吉和が磯に 屋戸や借らまし

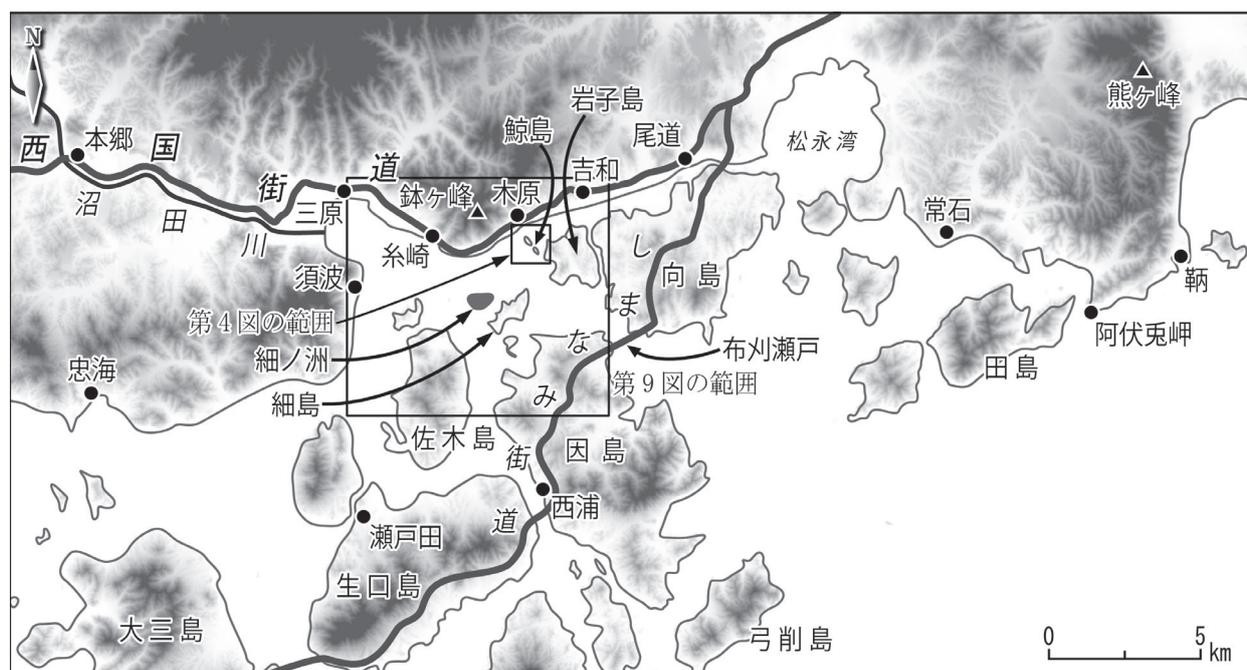
③その海中に、木深き小嶋二つ並びたり。これなむ鯨島といふなり。④年毎の師走に鯨といふ魚多く寄り来つつ、又の年の睦月に又帰り待るとなむ。⑤「これは、ここに居ます神の誓ひにてかく侍る」と海人どもの申すなり。それより猶南に大海に出づる境をば、布刈の浦とぞいふなる。

⑥北より南にさし出でたる山さきに、松や檜原繁りて、いとおもしろき尾上あり。糸崎とぞいふ。(和歌省略) ⑦向ひに干潟を隔てたる山を因島といふなり。

(番号と区切りは筆者)

①および⑥から、この日の経路は尾道～吉和～糸崎～沼田であり、江戸時代の西国街道（山陽道）と同様に瀬戸内海沿いを通ったことが地図上からも明らかである（第2図）。「干潟」「磯路」などと記されていることから、海のすぐ近くを通ったことがわかる。沼田の位置に関しては、本郷付近と推定したい。②の和歌は「日も暮れてしまった。夕潮に遠く流れ行く葦、葎ではないが、この吉和の磯の辺に宿を借りるとしよう」という内容であり、夕暮れ時に引き潮で葎がなびいている様子を見て詠んだ和歌であると推測できる。海上保安庁の潮汐推算¹²⁾を用いて、この日の潮汐を算出すると、午後は18時頃に干潮となることが判明する（第3図）。尾道付近における7月上旬の日没は19時過ぎであり、夕暮れ時は干潮であったといえる。

③には、木が深く茂った小島が二つ並び、これを鯨島と呼ぶことが記されている。この一文は鯨島の資料上の初見であり、室町時代から鯨島と呼ばれていたことが判明する。この記述の通り、現在も鯨島には木が生い茂っていることから、『道ゆきぶり』の時代とほぼ同じ姿であると考えられる（第4・5図）。鯨島の名前の由来について、『備後向島岩子島史』では『道ゆきぶり』の記述を引用



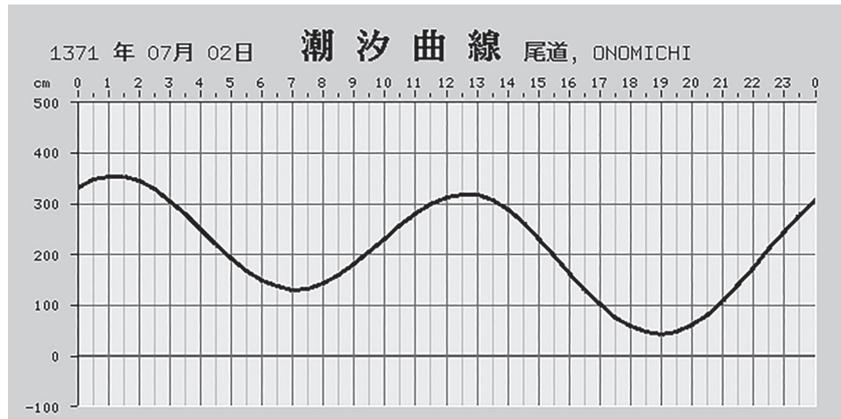
第2図 鯨島周辺の主な地名

注：標高の陰影は、国土地理院「基盤地図情報 標高メッシュデータ」を使用し、GGIS2.18 で表示した。

し、クジラが集まってくるところから鯨島と名付けられたと考えられている¹³⁾。鯨島は2島の無人島で構成され、そのうち大きい方を大鯨島、小さい方を小鯨島と区別して呼ぶこともある。

④には、毎年、師走に多くのクジラが鯨島の周りに寄り集まって来ること、そして、翌年の正月に帰って行くことが記されている。旧暦の師走は、西暦の12月下旬～2月上旬頃、睦月は1月下旬～3月上旬頃にあたる。この一文はクジラが瀬戸内海に毎年1月頃になるとやってきて、3月上旬頃には帰ってゆく、つまり冬に回遊してくると語られていた点が重要である。また、そのことを書いた日本で最も古い記述と考えられる。その一方で、「鯨といふ魚」と記されていることから、クジラを魚と捉えていたことがわかる。日本で初めてクジラは魚ではないと書かれた本は、江戸時代中期の1760年に刊行された『鯨志』である¹⁴⁾。日本では室町時代末期以降の捕鯨によって、クジラに関する情報が蓄積されたため、それ以前の記録という点でも『道ゆきぶり』は貴重であるといえる。

⑤は、「これは、この島に鎮座する神の誓願によって、このようにするのです」と、海人たちが語った内容である。この一文から、鯨島に住む神の誓願によってクジラがやってくると信じられていたことが判明する。この箇所は海人たちが語った話として記されており、了俊が海人たちから聞いた話と考えることができる。

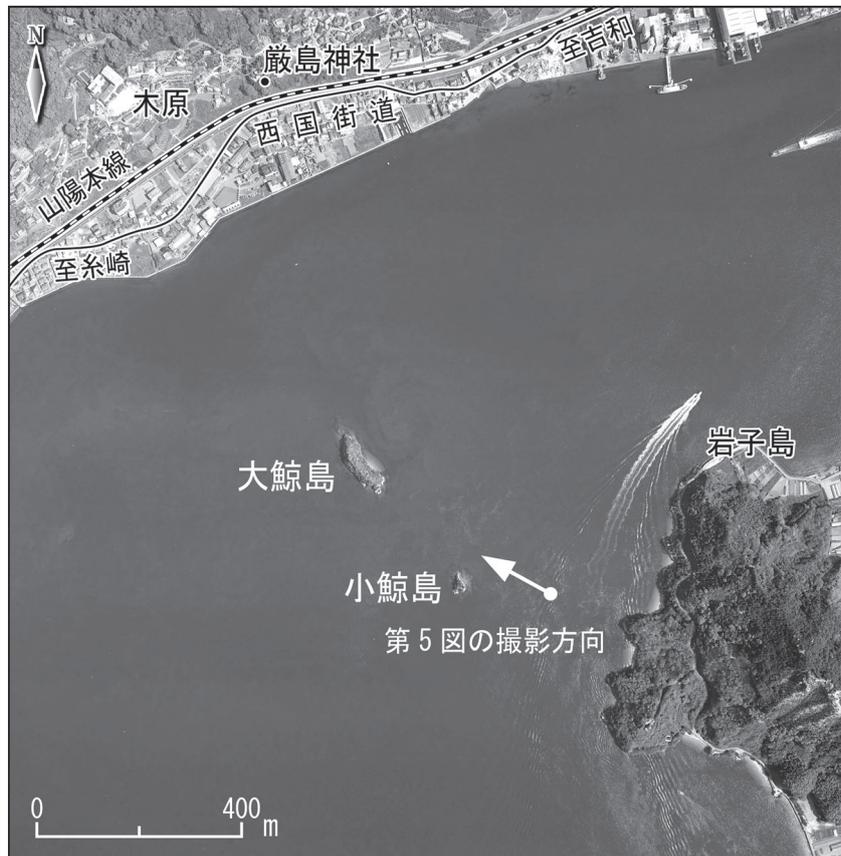


第3図 今川了俊が細ノ洲を見た日の潮位

注：海上保安庁「潮汐推算」ホームページ

http://www1.kaiho.mlit.go.jp/KANKYO/TIDE/tide_pred/index.htmより転載。

左肩の日付はユリウス暦で示されている。この日はグレゴリオ暦の1371年7月10日にあたる。



第4図 鯨島付近の空中写真

注：国土地理院 空中写真 CCG20102-C15-42 (2010年撮影) を使用。

⑥は、北から南へ差し出た山崎に、松や檜が繁っていて、たいそう情趣深い峰が糸崎であり、⑦は、向かいに干潟を隔たててそびえる山が因島である、つまり糸崎から海の方を見ると因島の手前に干潟が存在すると記している。このことから、鉢ヶ峰のある木原～糸崎間の半島から因島の方向を見下ろした際の風景であると推定で



第5図 海上から見た大鯨島と小鯨島

注：一般社団法人尾道観光協会 2014年5月4日撮影。

「無料写真素材おのみちや」ホームページ (<https://www.ononavi.jp/onomichiya/>) のNo.3311を使用。

きる。この干潟が細ノ洲であり（第2図）、室町時代から存在していたことがわかる。また、糸崎から2kmほど手前の吉和付近を通った時に、引き潮に流される葦の様子を和歌に詠んだことから、この時は正に干潮の時間帯であり、日没間近の海に干潟が広がっていた風景を見たものと考えられる。

この後、了俊は夕闇の中を、目的地である沼田へと向かった。そこにもまた3か月余り滞在したのち、山陽道を西へと進み、応安四年九月二十日（1371年11月6日）には、厳島神社に参詣して海中に仏舎利を奉った。その後、晩秋の山陽道を通って、防府市三田尻にあった周防国府や、下関市長府にあった長門国府での滞在を経て、同十一月二十九日（1372年1月5日）に、九州を望む関門海峡の赤間関へ到着したところで、『道ゆきぶり』は終わっている。京都から赤間関まで10か月余りにわたる山陽道の長い旅であった。

了俊はこの18年後、室町幕府将軍足利義満の厳島詣に随行した際にも、船で尾道から西へと厳島に向かう途中で鯨島付近を航行している。この時の紀行文『鹿苑院殿厳島詣記』¹⁵⁾には、「備後国尾道といふ所の西に、鯨島・糸崎・生口島などいふ浦々、北に当たりて見ゆ。此所々は、往にし比、筑紫へ下り侍りし時、通り侍りしなりけり」と、筑紫（九州）へ下った『道ゆきぶり』の旅で鯨島付近を通ったことに言及している。この日は1389年3月9日のため、帰ってゆくクジラが付近を泳いでいたかもしれない。

Ⅲ. 江戸時代の鯨島と鯨の宮について

三原市史所収の『備後国三原廻』¹⁶⁾は、城下町であった三原および周辺5ヶ村の社寺・名称・古跡などを紹介した旅行便覧である。この中で、鯨島に鯨の宮が存在することや、その宮には冬になるとクジラが来ることなどが記されている。その成立時期には、江戸時代中期の明和・安永・天明の3説あり、中でも天明年間（1781～1789年）の可能性が高いと推定されている。作者は三原西町の本原尚房であり、地元の住人が執筆していることから、鯨島に関する内容は当時語り継がれていたものと考えられる。本稿では、三原市史に掲載されている「高尾本」および「里村本」を使用した翻刻を用いる。

『備後国三原廻』：

鯨山

①岩子島と北方の中にある小島なり。大小二島あり。木原村に属す。

②大鯨の周廻、二三丁。山上に小社あり。鯨の宮と号す。祭所を知らず。此の宮に鯨の年頭といふ事あり。毎年正二月の頃、鯨一つ此の島のあたりへ来たり。五六日又は半年斗にて帰る。

③(里村本)木原村沖にあり。山上に祠あり。祭所巖島大明神木原村に属す。鯨山二つあり。大鯨小鯨と云ふ。鯨神と云ふ誤りなるべし。

(中略)

④細島の西の方、潮ひるときは東西数百間の洲島あり。絶景云ばかりなり。是より南は因之島、東は岩子島、向島なり。因之島と向島との間、和布刈瀬戸と云ふ。

(番号と区切り、送り仮名等は筆者)

上の①から、鯨山と書かれている鯨島は、岩子島とその北側(木原村)の間にある小島で、大・小の2つの島があり、ともに木原村に属していたことが判明する。②に大鯨島は周囲が2～3町(1町=約109m、「丁」とも書く)、つまり200～300mであるという記述は、空中写真を見てもおおよそ正確であったことが分かる(第4図)。とくに重要な点は、大鯨島の山上には小さな社があり、鯨の宮と呼ばれている点、また、この宮にクジラの年頭(年始の参拝)があり、毎年2月頃に鯨がやってきて5、6日～半年ほどで帰るといふ点などである。

高尾本の本文は「半年」となっているが、『道ゆきぶり』の記述や次のIV章で述べる瀬戸内海のクジラの回遊を考慮すると、半年ではあまりにも長すぎ、半月の可能性が高いと考えられる。すでに述べた通り、『道ゆきぶり』からも3月上旬には帰っていくことが判明している。

一方、③の里村本では、おおよその意味は同じながら、大鯨・小鯨と書かれていることや、祭所が巖島大明神となっていることなどが注目される。現在、鯨島を南に見下ろす三原市木原3丁目の山裾には、巖島神社が鎮座しており、鯨島の祭神はこの神社と関わりがあった可能性が考えられる(第4図)。これは、鯨島の神の誓願によってクジラがやってくると海人たちが語った『道ゆきぶり』の内容との関わりが考えられる。『備後国三原廻』では、鯨島に社があり「鯨の宮」と呼ばれていることが記されている。このことから、『道ゆきぶり』の海人たちが語った話のように、鯨島の社とクジラとの関わりについての話は、少なくとも江戸時代中期までは語り継がれていたと考えられる。クジラと神が関わる話としては、大阪湾の住吉大社付近(第2図)で、江戸時代にクジラは熊野権現のお使いと信じられていた例がある¹⁷⁾。

④から、干潮時には細島の西方に周囲数百メートル(1間=約1.8m)の洲島が現れることが判明する。II章で述べた通り、『道ゆきぶり』に基づく、了俊が細ノ洲を見た時刻が、潮汐推算で干潮の時刻と考えられたことに一致する。これらの記述から、『備後国三原廻』の鯨島とクジラに関する内容は、『道ゆきぶり』のそれと非常によく似ている。江戸時代中期の鯨島にクジラが冬にやってきたことのみならず、大鯨島に鯨の宮があり、その年頭のためにクジラがやってくる点や、干潮になると細ノ洲が現れていた点が重要であるといえる。

『道ゆきぶり』や『備後国三原廻』から捕鯨に関する記述は見当たらないが、田島(第2図)からは、捕鯨船である持双船の船手として、毎年冬になると五島列島へ出稼ぎに行っていたことが知ら

れている¹⁸⁾。また、因島の西浦には、捕鯨の様子を描いた明治時代初期の絵馬も残っている。

しかし、昭和十三（1938）年に刊行された『備後向島岩子島史』では、鯨島について『道ゆきぶり』の内容を紹介するのみである。V章で述べる通り、明治時代末期までは、瀬戸内海にクジラが回遊してきていたが、昭和時代に入ると、クジラが回遊してくることもなくなり、鯨の宮の存在も忘れられていたのかもしれない。

IV. 瀬戸内海における捕鯨と鯨塚

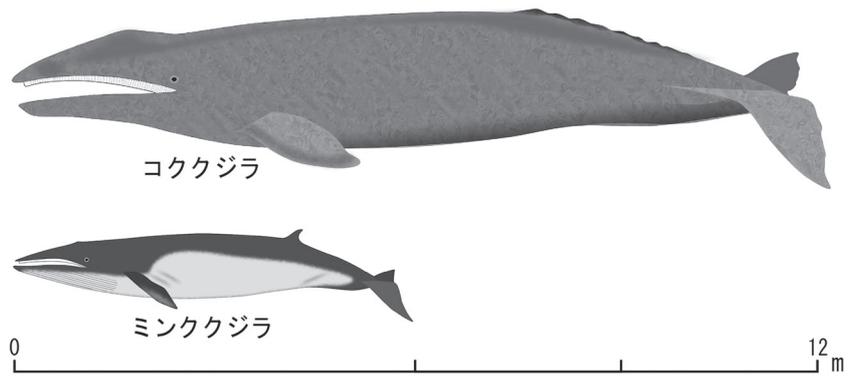
日本では、縄文時代からクジラが利用されてきたが、当時は海岸に座礁したクジラを利用した可能性が高いと考えられている。室町時代末期の16世紀後半からは、知多半島の師崎^{もろさき}で銆による突き捕り式の捕鯨が開始され、江戸時代前期の17世紀後半には、網取り式の捕鯨が始まったとされている¹⁹⁾。捕鯨は、師崎から各地に広まり、紀州の太地や九州北西部の平戸・五島列島などで盛んになった。それに伴い、捕鯨に同行した際の見聞録や絵画などの資料が多数作成された。『和漢三才図会』²⁰⁾には、クジラは冬に北から南へ移動し、春にはその逆であること、捕鯨の最盛期は冬であったことが書かれている。江戸時代におけるクジラ専門書としては、ほかに山瀬春政の『鯨志』（1760年）、大槻清準の『鯨史稿』（1808年）、シーボルトの『日本動物誌』（1844年）などが挙げられる。さらに、江戸時代に数多く刊行された図会類の一つである『日本山海名物図会』（1797年）には、実見に基づいたというクジラや捕鯨の様子が描かれている²¹⁾。

明治時代以降、ノルウェー式の捕鯨技術が導入され、遠洋での捕鯨も積極的に行われるようになった。その後、1980年代後半の国際捕鯨委員会（IWC）による捕鯨禁止を受けて、近年では商業捕鯨の代わりに調査捕鯨が行われてきた。しかし、日本は2018年12月にIWCを脱退したため、2019年7月から商業捕鯨が再開されている。これは、かつての捕鯨のように遠洋ではなく、日本の領海と排他的経済水域内で行われている²²⁾。捕鯨は太平洋のような外洋で行われる印象が強いといえるが、かつては瀬戸内海でも捕鯨が行われていた。

進藤の調査²³⁾によると、燧灘に面する香川県の大浜には、明治二十二～三十（1889～1899）年に鯨網²⁴⁾が存在し、冬に捕鯨が行われていた。その種類はコククジラやミンククジラ（第6図）であった可能性が指摘されている。当初は一漁期（一冬）あたり数頭が捕獲されていたが、明治時代末期には不漁のため捕鯨は中止となった。大浜の鯨網は、紀州のように捕鯨専門ではなく、タイ網漁などとともに鯨網漁を行っていた。同じく燧灘に面する愛媛県の川之江では、江戸時代末期の文久四年一月十三日（1864年2月21日）ならびに同十九日（同27日）にコククジラが捕獲された際の絵馬と鯨骨が残っている。

鯨塚とは、捕鯨や座礁などにより死亡したクジラの墓のことである。鯨塚・鯨塔など、様々な呼称・形態のものが日本各地に現存している。日本で初めて鯨塚の本格的な調査を行った進藤は、瀬戸内海では豊後水道沿岸に鯨塚が数多く建立されていることを明らかにした²⁵⁾。彼の聞き取り調査からは、明治三十（1899）年頃まで、晩秋から冬にかけてクジラが繁殖のため別府湾にやって来て、十数頭の群れで100mほど沖を海岸に沿って泳いでいたことが判明した。そこで、彼は豊後水道がクジラの回遊経路であり、明治時代中期までは、クジラが冬の瀬戸内海へと生殖のために回遊してきていたと考えた²⁶⁾（第7図）。

鯨塚は、江戸時代中期以降に建立されるようになり、とくに明治時代に多い。そもそも、豊後水道では捕鯨がほとんど行われておらず、食糧難や資金難の際に「寄り鯨」の肉を売って救われたために鯨塚を建立した例や、クジラに戒名がつけられた例などが詳しく調査されている。近年の研究では、さらに多くのクジラ塚が把握されるとともに、明治時代にクジラの回遊が増加したのではなく、むしろ廃仏毀釈や民衆信仰などと関連すると考えられている²⁷⁾。



第6図 コククジラとミンククジラ

注：国立科学博物館ホームページ「海棲哺乳類データベース（海棲哺乳類図鑑）」

https://www.kahaku.go.jp/research/db/zoology/marmam/pictorial_book/index.html をもとに筆者作図。

V. 瀬戸内海を回遊したクジラについて

以上、紀行文『道ゆきぶり』の鯨島に関する記述から、室町時代には冬になると鯨島周辺にクジラが回遊してきていた可能性を明らかにした。これとよく似た内容は、『備後国三原廻』にも記されており、少なくとも江戸時代中期までは、冬になると鯨島周辺にクジラが回遊してきていたと考えられた。そこで、かつては瀬戸内海をクジラが回遊していたと考えた大村や進藤の研究をもとに、どのようなクジラが回遊していたのか考察を試みる。

IV章で述べた通り、進藤は、豊後水道を中心とした瀬戸内海における鯨塚の分布や、燧灘における捕鯨の記録から、明治時代までは冬になると瀬戸内海をクジラが回遊していたと考えた。

大村は、千葉県市川市で発掘された鯨骨がコククジラのものであること²⁸⁾ や、紀伊半島の太地や室戸半島の浮津で、江戸時代から明治時代にかけて、冬にコククジラが捕獲されていたことを明らかにした²⁹⁾ (第1図)。長崎の出島に滞在し、オランダ商館長の江戸参府に随行したケンペルは、瀬戸内海の三田尻付近でクジラを目撃しており³⁰⁾、これもコククジラの可能性があるという。さらに、大正三(1914)年に刊行された『愛媛県水産要覧』では、伊予灘がナガスクジラ海域と記載されており、昭和十九(1944)年に刊行された『万葉動物考』³¹⁾ では、祝島がクジラの生殖地と考えられている(第7図)。しかし、大村は、クジラの生態学的視点から、伊予灘のような遠浅の海で生殖するのはコククジラではないかと推定した。

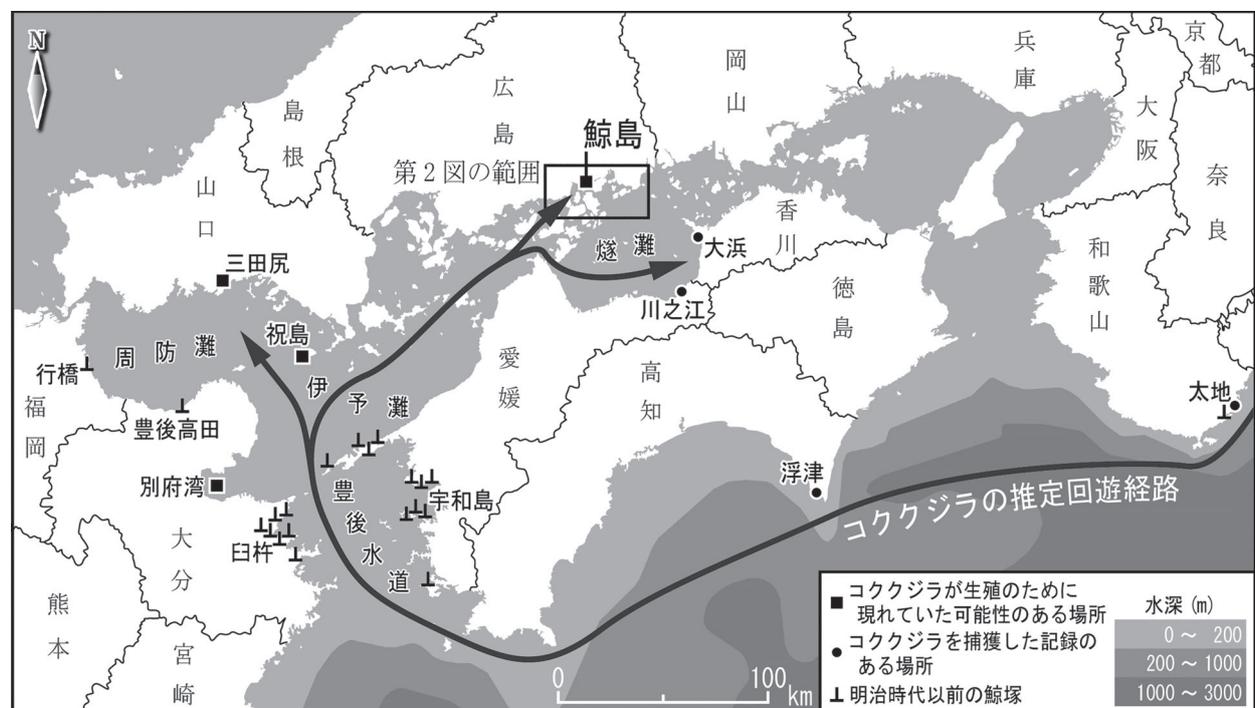
ここで、クジラの種類や生態に目を向けると、クジラ類は、大きくハクジラ(歯クジラ)とヒゲクジラに分類される。ハクジラは、歯で獲物を捕らえるクジラで、イルカ類やゴンドウクジラなどが、ヒゲクジラには、世界最大の生物とされるシロナガスクジラをはじめ、比較的小型のコククジラやミンククジラなど、多くのクジラ類が該当する。夏に高緯度の海で餌を食べ、冬になると生殖のために低緯度へと移動するものが多く、鯨髭を使ってオキアミや魚など小型の獲物を濾し捕って食べている。

コククジラは、北太平洋にのみ生息し、夏に高緯度の海で餌を食べ、冬になると生殖のために低緯度の海へ回遊してラグーンで生殖する。現在、アラスカからカリフォルニア半島まで回遊する北太平洋東部個体群と、オホーツク海から黄海や海南島付近まで回遊するとされる北太平洋西部個体群が知られている³²⁾(第8図)。前者は、海鳥を除くと地球上で最も長い距離を回遊する生物である³³⁾。コククジラが生殖するラグーンとは、水深が浅く波が穏やかな潟湖のことであり、太平洋東部個体群の生殖地であるカリフォルニア半島周辺にも数多く存在する。

大村は、瀬戸内海や太平洋の捕鯨記録もすべて冬であったことから、コククジラには北太平洋西部個体群のほかに、オホーツク海から日本列島の太平洋岸を南下した個体群がおり、その回遊の目的は、水深が浅く波が穏やかな瀬戸内海で生殖するためであったと考えた³⁴⁾。以上の場所を地図上で辿ってみると、コククジラが日本列島の太平洋岸に沿って南下し(第8図)、豊後水道を通過して瀬戸内海まで回遊したことが推定できる(第7図)。

以上の研究成果に基づくと、冬に鯨島周辺へ回遊してきたと『道ゆきぶり』や『備後国三原廻』に記されているクジラは、コククジラであったと考えることができる。江戸時代から明治時代にかけて、五島列島周辺や太平洋岸でコククジラが捕獲されていた記録が多数残っている。漢字では「小鯨」あるいは「児鯨」と書かれ、いずれも小さいクジラを意味している³⁵⁾。沿岸付近を回遊する生態のため捕鯨の対象にされ、和名が付けられていることから、かつては日本人にとって身近なクジラであったと考えられる。

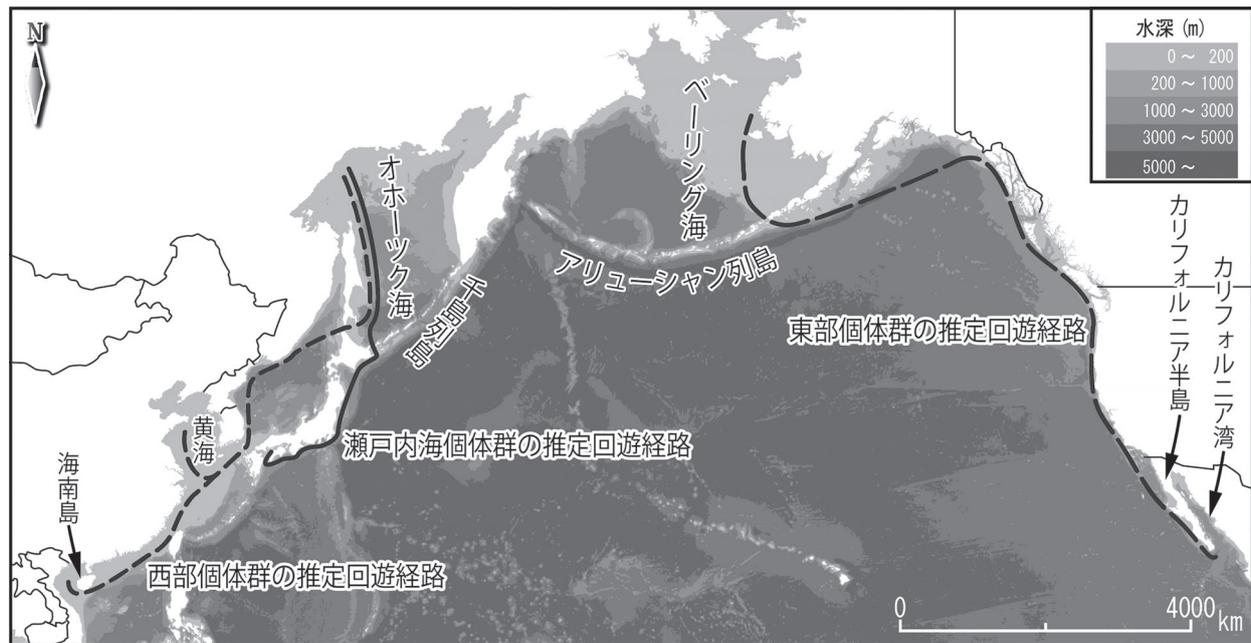
進藤は、鯨島周辺の海が、ゴンドウクジラの生殖場所であったと考えた³⁶⁾。これは、民俗学者の宮本常一の著書³⁷⁾に、かつて、鯨島にはゴンドウクジラやミンククジラが集まってきたと書かれて



第7図 瀬戸内海周辺の鯨塚とコククジラの推定回遊経路

注：進藤直作（1970）『瀬戸内海周辺の鯨塚の研究』、生田区医師会ならびに大村秀雄（1974）『鯨の生態』、共立出版を基に筆者作図。

水深データは、Natural Earth Large scale data (<https://www.natureearthdata.com/>) を QGIS 2.18 で表示したものである。



第8図 北太平洋におけるコククジラの回遊経路

注：大村秀雄（1974）『鯨の生態』、共立出版を基に筆者作図。

水深データは、第7図と共通。

いるためと考えられる。ゴンドウクジラが姿を現していた可能性はあるが、このクジラは外洋性で、季節的な回遊をしないとされている³⁸⁾。そのため筆者は、冬になると鯨島周辺に回遊してきていたクジラは、主にコククジラであったと考えたい。ただし、沿岸域にも生息し、瀬戸内海でも捕鯨されていたミンククジラなどもまた、回遊してきていた可能性が考えられる。

次に、ラグーンで生殖するコククジラにとって、鯨島周辺は生殖に適していたのかについて考察する。海上保安庁発行の海底地形図を見ると、糸崎から因島周辺は水深20m程度の浅瀬が広がっている上に、島々に囲まれた海域であり、波も穏やかでラグーンと似た環境と考えられる（第9図）。Ⅱ・Ⅲ章で述べた通り、糸崎の南方の海上に、干潮になると細ノ洲と呼ばれている干潟が現れることが明らかである。また、海上保安庁の海洋台帳³⁹⁾をみると、細ノ洲は海藻類が多い藻場の分布域にも指定されており、単なる干潟でなく餌となる底生生物や小魚なども豊富に存在していると推定できる。そのため、波が穏やかな浅瀬で冬に生殖するコククジラにとって、生殖しやすい環境であったと考えることができよう。

進藤や大村によると、明治時代末期以降は、船の動力化や水質悪化など環境の変化に伴って、瀬戸内海にはクジラが寄り付かなくなってしまったという。しかし、太平洋や東京湾、伊勢湾では、近年にもコククジラが目撃事例⁴⁰⁾があり、日本列島の太平洋側から完全に姿を消したわけではない。また、瀬戸内海でも大型のクジラが時々目撃されている⁴¹⁾。その一方で、現在、瀬戸内海に唯一生息するクジラ類であるスナメリは、食物連鎖の上位に位置することから水質悪化の影響を受けている。伊勢湾の個体と比較しても、瀬戸内海の個体は有害物質の蓄積が多い上、その個体数が大幅に減少している可能性が指摘されている⁴²⁾。瀬戸内海は外洋との出入り口が少ない閉鎖性の高い海域であり、有害物質に汚染されやすいという点でも、現在の瀬戸内海はクジラが生殖するためには厳しい環境であるといえよう。環境が大幅に改善されるまでは、再び瀬戸内海にクジラが回遊してくることは難しいと考えられる。



第9図 海底地形図にみる「細ノ洲」周辺

注：図中の数値（等深線）は干潮時の最低水面からの水深を示している（山頂の標高を除く）。基図には、海上保安庁（1987）「海底地形図 備後灘（5万分の1）」を使用した。

VI. おわりに

本研究では、室町時代の紀行文『道ゆきぶり』や江戸時代の旅行便覧『備後国三原廻』をもとに、今となっては瀬戸内海で滅多に見ることのできないクジラが、かつては毎年冬に回遊してきていた可能性を明らかにした。『道ゆきぶり』や『備後国三原廻』が存在しなければ、鯨島やクジラの回遊について具体的に明らかにすることは不可能であった。その一方で、紀行文だけでクジラの生態を踏まえて研究することは不可能であり、進藤や大村による瀬戸内海におけるクジラの生態や回遊に関する先行研究も欠かせなかったといえる。

室町幕府の九州探題に任命された了俊は、京都から九州へ向かう道中で、「毎年、師走になると鯨島にクジラがやってきて、翌年の睦月に帰ってゆく。これは、この島に鎮座する神の誓願によって、このようにするのは」という話を聞き、紀行文『道ゆきぶり』に記した。さらに糸崎付近から、因島の手前がある干潟を見たという記述があり、海上保安庁の「潮汐推算」を用いると、それは干潮の時刻であったことが判明した。了俊は実際に干潟を見たと考えられ、『道ゆきぶり』における風景の記述が極めて正確であることを実証できた。

さらに、鯨島のある広島県三原市域の資料を調査すると、この『道ゆきぶり』の一文とよく似た

内容が、江戸時代中期の旅行便覧である『備後国三原廻』にも記されていることが判明した。さらに、鯨島に社が存在して鯨の宮と呼ばれていたことも記されており、『道ゆきぶり』の「鯨島に鎮座する神の誓願によってクジラがやってくる」という話との関連性が考えられた。また、細ノ洲に関しても、干潮時に広大な洲島が現れると記され、了俊が干潮の時に見た細ノ洲のことであると考えられた。海底地形図（第9図）を見ると、そのような干潟は細ノ洲のみでなく、周囲には干潟や浅瀬が広がっていることも確認できた。

一方、クジラの生態研究では、進藤が鯨塚の分布や捕鯨の記録に基づき、明治時代までは冬の瀬戸内海にコククジラが単なる迷入ではなく、回遊してきていたと考えていた。大村は、それに加えて、ラグーンで生殖するコククジラの生態学的視点を踏まえて、浅瀬が広がり、波が穏やかな瀬戸内海へ冬になると回遊してきていたと考えていた。そのため、『道ゆきぶり』や『備後国三原廻』から、冬になると鯨島周辺にクジラが回遊してくることが判明したため、それはコククジラであったものと考えることができた。

このように、今では失われた過去の風景を研究するために、紀行文は重要であり、有用な資料であるといえる。『道ゆきぶり』は、歌人・教養人としても著名な了俊が遺した文学作品としての紀行文のみならず、旅の道中で見た引き潮や干潟などの正確な風景描写、海女たちから聞いたクジラの話までも記録した、フィールドワークの資料と捉えることも可能である。

今後は、本研究で取り上げた資料についても、内容をより精査し、鯨島周辺のクジラ関連の地名や関連資料の有無についても調査する。鯨島のように、クジラ関連の地名は全国各地に存在するため、歴史時代におけるクジラの回遊を明らかにする手掛かりになると考えられる。鯨塚や捕鯨に関する資料は、従来の研究でも比較的多く用いられているが、寄り鯨や目撃例の記録なども対象とする必要があるといえる。歴史時代のクジラの回遊に関して不明な点が多く、全国に数多く残されている『備後国三原廻』のような江戸時代の旅行便覧や地誌も用いて、広い視点で研究を進める必要があると考えられる。

付記

本稿は、歴史地理学会第62回大会（於：立命館アジア太平洋大学、2019年5月18日）ならびに歴史地理学サマーセミナー（於：愛知県立大学、2019年9月19日）で発表した内容の一部である。会場の皆様から貴重なコメントを頂きました。また、本稿を執筆する上で立命館大学文学部の片平博文先生にアドバイスを頂きました。記して、御礼申し上げます。

注

- 1) 倉本一宏（2015）『「旅」の誕生：平安－江戸時代の紀行文学を読む』、河出書房新社。
- 2) 福田秀一（1990）「中世日記紀行文学の展望（『中世日記紀行集（新日本古典文学大系51）』）、岩波書店、所収、507-513頁。「文学性を有して文学作品と認められるものを総称して日記文学、特に紀行については紀行文学と呼ぶが、その文学性は平安時代における仮名の発生と仮名文の発達によって大きく促され、『土佐日記』『蜻蛉日記』以下のすぐれた作品が現れたことは、周知の通りである」とされている。
- 3) 榎原雅治（2019）『中世の東海道をゆく』、吉川弘文館（初版2008年、中央公論新社）。
- 4) 山内譲（2004）『中世 瀬戸内海の旅人たち』、吉川弘文館。この中で、歴史学の視点から、瀬戸内海を通行した紀行文や史料に基づき、中世における経路や拠点とされていた津の特定が行われている。また、室町時代には、それ以前に比べて比較的沖合を航行していた上、1日当たりの航海の距離も伸びたと考えられている。

- 5) 村上晴澄 (2018) 「室町時代の紀行文からみる瀬戸内海の旅」、歴史地理学 60-1、1-18。
- 6) 渡辺世祐 (1902～1907) 「足利時代の山陽道」歴史地理 4・8～10。「道ゆきぶり」の地名と、江戸時代の山陽道である西国街道との比較を通して、室町時代における山陽道の経路が明らかにされた。
- 7) 角重 始 (1990) 「『道ゆきぶり』の世界」、文教國文學 25、10-27。
- 8) ①川添昭二 (1988) 『今川了俊』、吉川弘文館。
②荒木尚 (1977) 『今川了俊の研究』、笠間書院。
- 9) 長谷章久編 (1985) 『中国名所図会 卷之三 (『日本名所風俗図会 13 中国の巻』)』、角川書店、495-564 など。
- 10) 藤川功和 (2010) 「描かれなかった「尾道」の和歌－今川了俊『道ゆきぶり』を読む－」、尾道市立大学地域総合センター叢書 4、1-12。
- 11) 本稿では『道ゆきぶり』の本文として、荒木尚編 (2004) 「道ゆきぶり (渡辺静子・西沢正史編『中世日記・紀行文学全評釈集成 6』)」、勉誠出版を用いた。現代語訳は、稲田利徳 (1992) 「今川了俊『道ゆきぶり』注釈 (二)」、岡山大学教育学部研究集録 89 を参考にした。
- 12) 潮汐推算は、海上保安庁ホームページ http://www1.kaiho.mlit.go.jp/KANKYO/TIDE/tide_pred/index.htm (2019年8月19日閲覧) で公開されている潮位検索システムである。現在の験潮所における最低水面に対する潮位を算出した値である。国土地理院の地形図の海拔は、東京湾における平均水面からの高さ、海岸線は満潮時の水位に基づく。海底地形図の陸地は国土地理院の地形図を用い、水深は最低水面からのそれを示している。
- 13) 菅原守編纂 (1938) 『備後向島岩子島史』向島西村郷土史研究会。
- 14) 小川鼎三 (1953) 『鯨の話』、中央公論社。
- 15) 荒木 尚編 (2004) 「鹿苑院殿巖島詣記 (『中世日記紀行文学全評釈集成 6』)」、勉誠出版、51-85。
- 16) 三原市役所編 (1970) 『三原市史 4 (資料編第一)』、三原市、298-331。
- 17) 進藤直作 (1968) 『瀬戸内海の鯨の研究』、神戸市医師協同組合、103-104。
- 18) 香川県歴史博物館編 (2007) 『瀬戸内海をクジラが泳いだ』、香川県歴史博物館。
- 19) 森田勝昭 (1994) 『鯨と捕鯨の文化史』、名古屋大学出版会、125-180。
- 20) 寺島良安 (1987) 『和漢三才図会 7』、平凡社。
- 21) ①平瀬徹斎 (1797) 『日本山海名物図会 卷之五』 (浅見恵・安田健訳編 (1992) 『近世歴史資料集成 (第2期 第1巻)』、科学書院)。
②長谷章久編 (1982) 『日本名所風俗図会 (16 諸国の巻)』、角川書店、251-253。
- 22) 読売新聞社「商業捕鯨 31年ぶりに再開、釧路港で2頭水揚げ」、読売新聞 (2019年7月1日夕刊)。
- 23) 進藤直作 (1976) 「瀬戸内海の高ゲクジラ考 (上)」、伊予史談 222・223、29-36。
- 24) 大浜の鯨網とは、クジラを捕るための網そのものではなく、他所で鯨組と呼ばれることの多い捕鯨組織のことである。
- 25) 進藤直作 (1970) 『瀬戸内海周辺の鯨塚の研究』、生田区医師会。
- 26) 進藤直作 (1977) 「瀬戸内海の高ゲクジラ考 (下)」、伊予史談 224、19-27。
- 27) 宮脇和人・細川隆雄 (2008) 『鯨塚からみえてくる日本人の心 1 豊後水道海域の鯨の記憶をたどって』、農林統計出版。
- 28) 大村秀雄 (1982) 「市川の鯨」、鯨研通信 345、19-26。
- 29) 大村秀雄 (1974) 『鯨の生態』、共立出版。
- 30) ケンペル (斎藤信訳) (1977) 『江戸参府旅行日記』、平凡社、236-237。
- 31) 東光治 (1944) 『萬葉動物考・続』、人文書院。
- 32) 北太平洋西部個体群と呼ばれるロシア沿岸の個体の一部が、カリフォルニア半島サンルカス岬まで回遊し、東部個体群と合流していたとされている。National Geographic インターネット版 2015年4月16日付記事 (<https://natgeo.nikkeibp.co.jp/atcl/news/15/041600052/> 2019年8月22日閲覧)
- 33) 笠松不二男 (2015) 『クジラの生態』、恒星社厚生閣、77。
- 34) 大村秀雄 (1986) 『第二鯨学事始』、講談社出版サービスセンター、176-187。
- 35) 小島孝夫編 (2009) 『クジラと日本人の物語—沿岸捕鯨再考』、東京書店。

- 36) 進藤直作 (1978) 『鯨の文化史』 青谷書房、106。
- 37) 宮本常一 (2011) 『瀬戸内海 2 芸予の海 (私の日本地図 6)』、未来社 (初版 1968 年)。
- 38) 国立科学博物館「海棲哺乳類図鑑」ホームページ https://www.kahaku.go.jp/research/db/zoology/marmam/pictorial_book/index.html (2019 年 9 月 30 日閲覧)
- 39) 海上保安庁「海洋台帳」ホームページ <http://www.kaiyoudaichou.go.jp/index.html> (2019 年 2 月 14 日閲覧)
- 40) 南部久男・徳武浩司・石川創・大田希生・藤田健一郎・山田格 (2009) 「2005 年に東京湾に出現したコククジラの観察」、日本セトロジー研究 19、17-22。
- 41) ①来島海峡付近でのクジラの日撃事例 (2019 年 6 月 1 日)「愛媛新聞オンライン」<https://www.ehime-np.co.jp/article/news201906020041>
②小豆島付近におけるクジラの日撃事例 (2018 年 12 月 11 日)「朝日新聞デジタルニュース」<https://www.asahi.com/video/articles/ASLDC466HLDCPLXB00L.html>
③今治市沖のクジラの日撃事例 (2015 年 1 月 25 日)「テレ朝 NEWS」https://news.tv-asahi.co.jp/news_society/articles/000043184.html など。いずれも 2019 年 9 月 11 日閲覧。
④国立科学博物館ホームページ「ストランディングデータベース」<https://www.kahaku.go.jp/research/db/zoology/marmam/drift/detail.php?id=8563> (2019 年 9 月 11 日閲覧) には、クジラ類の日撃情報や死体漂着などの記録が公開されている。2018 年 1 月 27 日には、山口県周南市大津島にザトウクジラが現れた記録がある。
- 42) 四国新聞社編 (2000) 『連鎖の崩壊 新瀬戸内海論』 四国新聞社、195-200。

(本学文学部助手)

Kujirajima as Seen in Imagawa Ryōshun's Travelogue, *Michiyukiburi*
—Whale Migration in the Seto Inland Sea—

by
Haruto Murakami

Travelogues are diaries written by the travellers themselves, which include accounts on the journey and scenery, and classical Japanese poetry or 'waka', among other writings, and until now, have often been considered literary works. This study analyses the *Michiyukiburi*, the travelogue—of the journey and the scenery, and of poetry—of Imagawa Ryōshun of the Muromachi Shogunate during his travel on the land route from Kyoto to Akamano Seki. Within it, he writes about stories that he heard from the fisherfolk of the Onomichi area in eastern Hiroshima, 'Whales arrive at Kujirajima every December, and return in the following January. They do this because of a vow made to the god enshrined on the island'. Kujirajima means 'Whale island' in Japanese. In addition to similar details, *Bingo no Kuni Mihara Meguri*, a travel guide from the mid-Edo period, also describes a shrine on Kujirajima called the 'Whale Shrine'. One can thus guess its connection to the 'god enshrined on Kujirajima' referenced in the *Michiyukiburi*.

From an ecological perspective, Shindo (1968) and Omura (1974) suggest that grey whales migrate to the Seto Inland Sea in winter for reproduction. The accounts from *Michiyukiburi* and *Bingo no Kuni Mihara Meguri* both say that winter is when the whales come. From the proposed route and season of grey whale migration, one can theorize that grey whales were migrating to Kujirajima.

The seabed maps of the Japan Coast Guard show that Kujirajima is surrounded by shallow waters less than 20 m deep, and has gentle waves owing to the islands around it—a suitable environment for grey whale reproduction. Grey whales are said to have disappeared because of the deterioration of the environment due to the motorization of boats and development of the coastal areas since the Meiji Era.

Keywords: Imagawa Ryōshun, *Michiyukiburi*, Seto Inland Sea, Whale migration, Kujirajima

